EDO-TOKYO MUSEUM 江戸東京博物館

# えど友

EDO-TOMO

えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

No.33
2006
（平成 18 年）
9 － 10

江戸東京博物館友の会会報

目次

江戸っ子パワーで夢実現を（浅草に江戸芝居小屋の動き）… 1
友の会セミナー『江戸時代の旅事情と旅人たち』…… 2
友の会セミナー『鹿鳴館の女たち』…… 3
特別内覧会『発掘された日本列島 2006 新発見考古速報展』… 4
江戸博クリップ『博物館マニア』…… 4
見学会『江戸四宿を歩く－内藤新宿その1』…… 5
江戸博の特集展示に注目！/ 企画展ご案内 …… 6
お知らせ / 会議・会合日誌 …… 6
ご意見・ご要望へのお答え …… 7
えど友サークルだより …… 7
えど友プラザ　特集「私の昭和・東京」その２
『徴兵・軍国主義・靖国神社』/『ああ隅田川溷濁の』/『母の胎内でみた大空襲』/『私の昭和・東京 学童疎開』/『むかしむかし?』… 8～9
江戸博界隈⑪［芥川龍之介史跡］と［炭火ステーキ・くに］… 10
催事案内 / 会員優待のお知らせ …… 11～12

# 江戸っ子パワーで夢実現を…

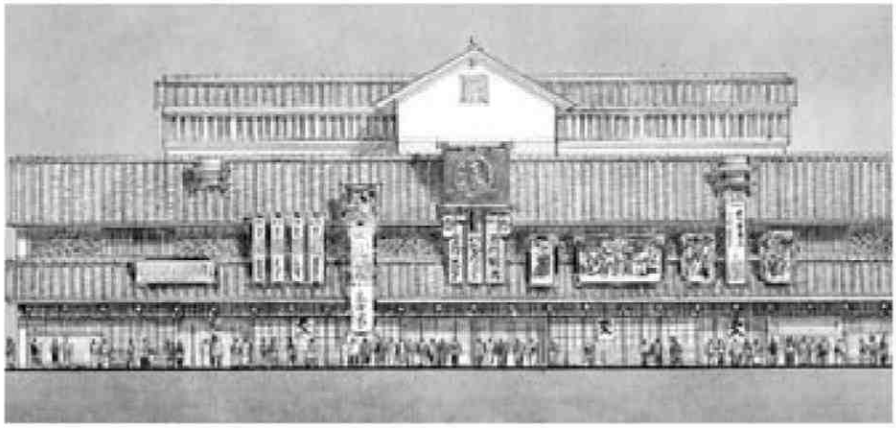
## ―浅草に江戸芝居小屋建設の動き―

江戸文化を今に継承する町、浅草は「天保の改革」(1841～1843) によって江戸三座（中村、市村、河原崎の三座）を移転集約した『芝居町』でもあります。中村座の前身猿若座にちなんで猿若町の町名が生まれ、その繁昌ぶりは「日に千両」と言われました。このにぎわいは各小屋が、明治になり分散するまで続いたそうです。

こうした由緒の下に準備期間１年半を経て、今年５月地元町会連合を母体に歌舞伎界、演劇界などからも有志が集まり、「浅草に江戸芝居小屋を！」のエネルギーが結集しました。台東区のサポートはもちろんのこと、江戸博の竹内誠館長や歌舞伎役者中村勘三郎も、代表発起人に名をつらねています。趣意書によれば建坪 700 坪 (約 2,300 ㎡)、席数 1,000 名ほどの江戸風芝居小屋を建設して、歌舞伎を中心とした演劇を興行し、新たな町づくりにつなげてゆきたいとのことです。

さて江戸博５階の常設展示場には中村座の模型が華やかに再現されています。あの情緒にみちた芝居小屋の雰囲気が、実現されるということです。江戸文化の一端を生き生きと伝える試みとして、この企画に興味と期待がいやがうえにも増してきます。事務局のお話では、10 万人規模の署名運動からスタートし、行政などとの摺 ( す ) り合わせを経てＮＰＯを立ち上げ、さらに各方面からの寄付や、賛同者の募金などによって資金を調達、約３年後の完成を日指してゆくというものです。歌舞伎ファンならずとも、ぜひ夢の実現を願わずにはいられません。

【取材】広報部会・稲垣武志



▲江戸芝居小屋イメージ図

▲江戸博５階中村座復元模型

第40回　江戸東京博物館友の会セミナー（2006/6/24）

# 江戸時代の旅事情と旅人たち

講師　高橋千劔破（ちはや）さん
（日本ペンクラブ常務理事・歴史・文芸評論家）

## 歴史は文学と一体

歴史とは、いろいろな角度から見ることができるものです。私は編集者ですから、学術的な歴史だけでなく、裏や斜めからも歴史を見てきました。歴史は文学と一体になっていることが面白いのです。私たちが知っている歴史は文学によるフィクションである場合が少なくありません。それを歴史と錯覚しているのです。

歴史と文学の狭間（はざま）、人間中心ではない、もう一つの視点から歴史を見てみたものが自著『花鳥風月の日本史』です。歴史が動いていく過程で、季節はいつだったか、風は吹いていたか、雨は降っていたか、どんな花が咲いていたか。これらも歴史に密接にかかわっていたはずです。歴史書や古典文学には結構書かれているのですが、私たちは残念なことにそれらをとばして読んでいるのです。

## 旅の過程こそ得るものが

江戸時代は極めて文化度の高い時代です。庶民が旅を楽しむというのも、当時のヨーロッパなどにはない「文化」です。江戸時代の旅は、自分の身は自分で守らなければなりません。“かわいい子には旅をさせろ”といわれたように、旅によって多くのことを覚えて帰ってきたのです。今の旅と決定的に違うのは、江戸時代は原則自分の足で歩いて、行って帰ってくる過程こそが旅でした。今はその過程を省きいきなり目的地へ行くので、得られるものは少なくなりました。

川になぜ橋を架けなかったのかについて、教科書などには「軍事上の目的で…」とありますが、まったくの嘘（うそ）です。日本の川は渇水期と増水期とでは水位の差があり過ぎるので橋が架けられなかったのです。毎年のように洪水で流されてしまいます。あえて、恒久的な橋を作らないのも日本人の知恵といえます。大雨で上流からの土砂や流木が橋にひっかかり一種のダムのような状態になるので、決壊して大洪水を引き起こすことを知っていたのです。

大井川の渡しなどで大名行列があると、橋を造っているのです。いわゆる「舟橋」です。舟を並べて板を渡せば、馬も渡れます。江戸時代の旅を考えるときについつい船を軽視しますが、旅人はずいぶん川舟などを利用していたようです。

昔の旅も荷物が多くなるので、宿場には必ず「問屋場（といやば）」があって、人馬の継立（つぎた）てを行なっていました。そこで荷物が少なければ料金の安い人足だけを一駅ごとに雇ったのです。馬も本馬（ほんま）（積荷40貫目・150kgまで許された）よりは軽尻（からじり）（荷なしの馬に旅人が乗ること。5貫目・約19kgまでの手荷物を許された）が荷重が少ない分だけ料金が安くてすみました。

## 文学サロンを展開

旅行中通用するのは銭ですから、一日に20文、30文のお金が、二カ月分にもなると硬貨ですから重くて持てません。そこで、旅人は両替屋で手形に替えてもらい、行く先々で少額ずつ現金化して使ったのです。

女性の旅人もなかなか多く、商家の女将（おかみ）さん連中など、年に1回、連れ立って1、2カ月程度の寺社参詣（さんけい）の旅を楽しんでいた例は少なくありません。それだけ安全な世の中でもあったのです。

面白いことに、金持ちだけが旅をしたわけではなく、貧乏人も結構旅をしています。聖や雲水などの行脚僧たち、旅芸人たち、その日暮らしの渡世人や貧しい巡礼者たちです。昔の日本人は貧乏な人たちには優しく、旅のできるシステムがあったのです。宿場のはずれや村々には「善根宿（ぜんこんやど）」があり、宿代を持たない貧者を泊めてくれたのです。

貧者ではなく、ただの旅をしていた人に文人墨客がいました。文化の伝播者である彼らは、地方の素封家や富商、有力な寺などに逗留（とうりゅう）して、句会を開くなどの文学サロンを展開し、また書画を書き残すなどして旅を続けたので、地方の文化度も高まりました。

また、旅がしやすかった一つに講の発達がありました。通行手形をもらうには寺社参詣が一番簡単なので、富士講などの講がたくさんありました。面倒なことをすべてやってくれる一種の旅行代理店のようなものでした。

このように江戸時代には学ぶべきものがいろいろとありました。

【記録】　文、写真：広報部会・菅沼和男

第41回江戸東京博物館友の会セミナー（4/20）

# 鹿鳴館の女たち

講師　近藤富枝さん（筆家）

日本が幕末から明治初年にかけて西欧諸国と結んだ不平等条約改正のために奮闘努力した政治家や軍人たちを助けてその婦人たちは鹿鳴館を舞台に非常に活躍しました。

## 女性たちの生き方

明治の初期、薩摩や長州の人たちが国もとに家族を残して「東京」へでてきました。当時、暮らしに困った旗本の娘たちが身売りをしたため、吉原や柳橋は美人が揃っています。彼らは水道の水で顔を洗った垢抜けした美人に心をひかれ権妻（妾）にしました。下級武士と旗本や大名の娘ということで不幸になった人もいますが、うまく生き抜き幸せをつかみ文化の向上に役立った人もいます。なお、この時代は権妻までは二等親として認められており女性にとっては屈辱的な時代だったのです。

## 梁山泊の人々

大隈重信（大蔵大輔）の権妻になった800石三枝家の令嬢綾子は15歳くらいで吉原に身売りをしました。19歳で大隈に見初められ明治2年（1869）に結婚します。当時、大隈は築地の大きな旗本屋敷を購入して、1人で暮らしていましたので、ここへ綾子を迎えたのです。大隈は31歳でした。綾子は大変な賢婦人でした。屋敷の中には薩長の人たちが大勢居候していました。大蔵大輔になる前の井上馨や伊藤博文などです。このために大隈の屋敷は梁山泊と呼ばれるほどでした。

井上馨にあっさりと権妻を譲る中井弘もここで暮らしていました。彼が国もとへ帰っている間に権妻武子と井上とが恋仲になってしまうのです。中井から許しを得た2人が一緒になる時、大隈綾子は井上に絶対に武子と生涯添い遂げることを誓わせます。中井は、後に第五代の京都知事になります。維新前に世界を漫遊した人で、京都の復興のために「都おどり」を始めました。

## 女子の教育

黒田清隆は酒乱の癖があり、明治11年(1878)誤解から妻の清を切り殺してしまいます。この事件は当時の警視総監が薩摩出身のため隠蔽されてしまいます。同じ薩摩の森有礼は維新前に外国を回った人で、黒田と2人が話し合って女子の教育を振興させることになります。

黒田は北海道に開拓使学校を明治2年(1869)に開設します。農場を開拓する人とその妻を養成するためです。米国の教育家ウィリアム・S・クラークが初代学長として明治9年(1876)に来日しました。この分校が増上寺に開拓使女学校として生まれました。その生徒の中に広瀬阿常がいました。

森有礼は阿常を見初め結婚します。新聞記者などを呼んでの人前結婚でした。夫婦は平等であるという契約結婚でもありました。しかし、不幸な結果に終わります。森は暗殺され阿常は気が狂って亡くなるのです。

明治4年(1871)10月吉益亮子、上田梯子、山川（後の大山）捨松、永井繁子、津田梅子が岩倉使節団としてアメリカへ渡ります。彼女たちは10歳にも満たない若さでした。捨松は大学を出てから看護学も学びました。後に彼女は妻を亡くした大山巌の妻になりますが、前妻の娘がホトトギスのモデルとして有名です。アメリカから帰った彼女たちの働き口はなく出来上がった鹿鳴館で踊ったりしていました。踊れる人が少なく御茶ノ水女学校の生徒たちもかりだされました。

## 鹿鳴館創設

不平等条約の改正のために、外務関係の人たちは非常に努力をしました。欧米と同じようにということで食べ物や髪型、服飾を同化しようとします。肉を食べ、衣装を洋服、髪型を洋髪に変え、鉄漿をやめて白い歯を見せはじめます。

ダンスの踊れる場所が必要となります。井上馨はイギリスの建築家ジョサイア・コンダー（一般にはコンドル）に鹿鳴館の設計を頼み現在の帝国ホテルの隣に建てることになります。日本には本式の建築学を学んだ人がいなかったからです。このときの助手・滝大吉（コンドルの弟子）は滝廉太郎の叔父にあたる人です。建設現場の地盤が悪かったため、松材を格子状にしき並べ、ところどころをボルトで締めて枠組にし、その上にコンクリートをベタ打ちして基礎としました。予算の少ない中でコンドルは苦心したのです。

明治16年(1883)年11月28日、初めての夜会が開かれた鹿鳴館も、明治27年(1894)の地震による損壊、華族会館への払い下げ・補修、昭和2年(1927)の日本徴兵保険など3社への転売を経て、昭和15年(1940)には老朽化のため取り壊されました。

このように明治初期の女性たちは、何とかして文化・文明の面で外国に追いつき、追い越して日本の繁栄を来たそうとして政治の一翼を担ったのです。

【文責】　広報部会・岡橋園子
写真・同・佐藤幸彦

江戸東京博物館友の会　特別内覧会
（2006/6/19）

# 発見された日本列島 2006 新発見考古速報展

6月20日から7月23日の間開催された恒例の「発掘された日本列島2006」新発見考古速報展の開会式と特別内覧会が、6月19日14時から開催されました。この展示、今年は5階の常設展示室の奥の第2企画展示室で開催されました。

遺跡の発掘は長期にわたるのがふつうです。周知の有名遺跡からも、新たな注目すべき遺品が多く出土しています。

福岡県八女市の鶴見山古墳からは埴輪ならぬ武装石人が出土しています。鎧兜に身を固め、両腕を水平に伸ばして通せんぼの形です。風土記の筑後の国の項(逸文)に、継体天皇の21年(527)に大和の物部麁鹿火と闘った筑紫君磐井の大きな墓の周囲は、60の石人と石盾で囲ってあったと記されています。付近の岩戸山古墳からも武装石人の頭部が出土していて、これが磐井の墓と比定されているのですが、鶴見山古墳は少し時代が下るものの、磐井に近い人の墓と推定されました。伊勢崎市の「三軒屋遺跡」は上野国佐位郡の郡衙跡で、ここでは約182㎡の八角形の倉跡が発見されました。古文書に見る「八面甲倉」と考えられています。八角のお堂は法隆寺の夢殿などに見られますが、八角の倉が確認されたのは初めてです。平安時代の数学の問題に「竹束八面蔵」というのがあり、その詳細はわからないのですが、このような倉の容量に関する算法だとすれば興味深いことだと思います。

大正12年(1923)の関東大地震で、突如水田の中に出現した旧相模川の橋脚は、建久9年(1198)に源頼朝の重臣稲毛重成が架けた橋の一部と考証され、大正15年(1926)に既に史跡に指定されていますが、今回保存整備事業が完成に近づいています。近年の知識で土壌の液状化現象で浮き上がったことがわかっており、そのことが橋脚周囲の地層からもわかります。

近代の遺跡では伊達政宗の晩年の屋敷「若林城」、高知城外の藩主下屋敷跡などが発掘されています。

開会式ではこの速報展実行委員長の藤本強氏から、今回のテーマに「遺跡でたどる国際交流」が加わっていることが強調されました。長岡京・平安京出土の唐の工芸品、北海道オホーツク海岸のオホーツク文化（青銅器、骨角器など）、鎌倉時代・室町時代の宋・元・明との貿易品、そして古代からの朝鮮との交流を示すのは福岡県西新町・藤崎遺跡の出土品、高崎市の遺跡からは朝鮮半島系の土器や装飾品、馬具などが出土しています。

以上展示の一部を紹介しましたが、合計48遺跡、730点の出土品、懇切丁寧な説明や写真で、今年は特に充実した「速報」と感じました。

【取材】文・写真：広報部会・佐藤幸彦

## 江戸博クリップ

# 博物館マニア

学芸員　松井かおる

私が学芸員を志したのは中2の夏休みでした。自由研究のテーマ「人類の歴史」を調べに国立科学博物館へ行きました。私が行ったころの恐竜や旧人類のジオラマ展示は、素朴でそれなりに迫力がありました。また北京原人とクロマニヨン人では顔立ちが全く違うのも驚きました。展示室奥の廊下のようなところに机を出して、学習相談をしており、疑問点をたずねると、親切に答えていただきました。さらに参考文献やその所在なども教えていただき、それがうれしくて、夏休みの間に5、6回博物館へ通いました。「氷河期」とか「ジュラ期」が載っている先史の年表をいただき、自分の知らない時間軸があったことに驚き、感心しました（ただし不思議なことに、科博の誰にきいても学習相談をする部署はなかったと言うのです。あそこに座っていたのはどなただったのでしょう）。

このときの体験から、自分の知りたいことを視覚的に把握できて、求めれば参考文献や時代背景なども教えてくれる「博物館」という施設がとても気に入りました。当時私は学校も勉強も嫌いでしたが、博物館で学ぶことは楽しく、私のペースに合っている気がしました。将来こんなところで働けたらいいなと漠然と思ったのです。こうして博物館マニアとなった私は、高校の時は変わり者でしたが、大学で文化人類学を専攻すると、同級生のほとんどが博物館マニアでびっくりしました。訪問学習で小中学生に会うたびに、彼らがこれをきっかけに博物館を好きになるといいなと思いながら展示を案内しています。

◆このコラムは江戸東京博物館の学芸員や調査員など館職員の方に執筆をお願いしています。

江戸東京博物館友の会　見学会（2006/6/10）

# 寺と坂の町四谷・充実した歴史散歩の一日

## ＜江戸四宿を歩く－内藤新宿その１＞

▲四谷見附門を通過して迎賓館へ向う

6月10日(土)、見学会『江戸四宿を歩く』が開催されました。今回は98名の参加者があり、甲州街道の宿場街、内藤新宿界隈を6名の案内員のもと各班に分かれて散策しました。

JR四ッ谷駅を出発した一行はまず四谷見附門を通過し、外堀通りを迎賓館方面へと向かいました。四谷の語源は、街道の休憩処として四つの店が設けられていたことから「四つ屋」が転じたという説と、四つの谷があったことから字のごとく四谷と呼ばれていたという説があり、見学コースも昇降のある道のりでした。江戸初期には原っぱだったこの地に伊賀者が移り住み、寛永13年(1636)にこの四谷見附が普請されると、街道沿いに町が発展してゆきました。

迎賓館、学習院初等科を通り越し、さらに一行は須賀町方面へと進みます。江戸城の拡張工事や火事などのため、多くの神社がほぼ同時期の寛永11－12年(1634－1635)にこの地へと移設されました。まずはじめに訪れた西念寺には、家康のもと伊賀組を統制していた服部半蔵の墓があり、また家康の嫡男(ちゃくなん)で信長に謀反を疑われ切腹に追いやられた岡崎三郎信康の供養塔がまつられていました。

続いて一行は同寺の裏手に観音坂を臨みます。坂途中の真成院には潮干観音と呼ばれる本尊があり、潮の干満によって湿ったり乾いたりすることから

▲於岩稲荷田宮神社に着く

この名が付けられたそうです。当時、江戸湾から入江がこの付近にまで入り込んでいたことがこうした言い伝えからもうかがえます。

次に訪れたのは愛染院で、内藤新宿開設の音頭役であり、初代の名主ともなった高松喜六の墓があります。内藤新宿の語源は、信濃高遠藩主内藤家の所領内における人馬の休み処であった内藤宿に対しての新しい宿場という説がありますが、「新宿」には、半蔵門からはじめの宿場町である高井戸との間に設けられた「新しい宿場」という説もあります。

続いて豆腐地蔵の伝説を持つ東福院へ向かいました。寺の入り口には手首を切られた地蔵が安置されています。豆腐売りをしながら悪事をはたらく男をこらしめるため、坊主に化けた地蔵が豆腐賃を葉っぱに変えたところ、怒った男に手首を切られてしまいました。しかし後を追った男はそれが東福院の地蔵であったことを知り、罪を悔いて地蔵のためにお堂を建て信仰したということです。

ここで見学と休憩を兼ねて新宿歴史博物館を訪れます。館内では学芸員の説明を江戸時代の甲州街道の模型を囲みながら受けました。模型に再現されている現在の四谷４丁目交差点中央にあった四谷大木戸は小型の見附になっており、江戸へ入る物資や人が改められましたが、夜には閉鎖されていたそうです。館内では江戸以降についても、明治、大正、昭和、現在へと、新宿が発展してゆく様子がさまざまな資料や楽しい展示によって解説されていました。

休憩後向かった祥山寺は、江戸時代この界隈に住んでいた伊賀組の霊を供養した忍者地蔵があり、忍者寺として知られています。続いて訪れた須賀神社は四谷の総鎮守で、かつては”お酉(とり)様”で花園神社をしのぐほどの賑わいを見せていたそうです。社内の三十六歌仙絵は、旗本画家の大岡雲峰、書は公家の千種有功によるもので、一枚一枚の繊細な表現、美しさに魅了されました。

一行は四谷正宗の墓・宋福寺を過ぎ、‘鬼平’でおなじみの長谷川平蔵の菩提寺である戒行寺へと向かいます。平蔵は赤坂で生まれた実在の人物で、寺の入り口には供養碑が設けられています。続いて‘首切り朝右衛門’の墓・勝項寺を経て、‘北向き毘沙門天’の本性寺を訪れました。家康が伊達氏の謀反を封じる願をかけ、毘沙門を北向きに置いたためこう呼ばれるようになったということです。

このあとお岩稲荷といわれる於岩稲荷田宮神社へ向いました。東海道四谷怪談のお岩ゆかりの神社で、東京都旧跡にもなっています。なぜかその向い側には「於岩稲荷霊堂」がある陽運寺というお寺があり、のぼり旗などが派手にあるのでお岩稲荷と間違えそうになってしまいます。そして最後に消防博物館に到着、解散後思い思いに見学しました。

大都会の真ん中に江戸時代の面影を訪ねる、充実した歴史散歩の一日でした。なお、内藤新宿は見どころが予想以上にあったため、今回を「その１」とし、いずれ「その２」を行うことになりました。

【取材】文・写真：広報部会・斉藤美香子

## 江戸博の『特集展示に注目』!

江戸博常設展の「特集展示」という形の期間限定・特定のテーマの展示は注目です。それを目当てにフラッと常設展を観覧するのも一興です（会員は常設展無料）。

▲5階東京ゾーンの「空襲と都民」コーナーの特集展示「かわいそうなゾウ－戦時中処分された動物たち」展。11月26日まで。

### 企画展ご案内

好評開催中。お見逃しなく！

**・美空ひばりと昭和のあゆみ展**

期間7月29日（土）～10月1日（日）
会場5階常設展示室内第2企画展示室

**次回予告**

**・荒木経惟「東京」プロジェクト「東京の誘惑」展**

期間10月11日（水）～12月26日（火）
会場5階常設展示室内第2企画展示室

## 友の会からのお知らせ

**●「友の会の個人情報の取り扱い」について**

友の会では、入会時に皆さんから住所・氏名・年齢・性別・電話番号・Eメールアドレスをお聞きしています。これは友の会の諸活動を会員の皆さんにご連絡するために必要だからです。

ただ、最近、企業・団体などからこうした個人情報が漏洩（ろうえい）したり、個人情報に起因するトラブルが多発しています。友の会ではこうした現状を踏まえ、会員の皆さんから提供された上記の個人情報については、友の会の本来的な活動のためにのみ使用するとともに、管理についても十分な注意を払うことを7月13日開催の役員会において申し合わせしました。

なお、上記の目的以外に使用する場合には、役員会において十分検討したうえで、その可否を決定することも併せて確認いたしましたのでお知らせいたします。

**●「えど友サークルへの支援」について**

えど友サークルの活動は自主的な運営を原則としていますが、今まで大なり小なり友の会（事務局）が関与する部分がありました。その負担をなるべく軽減し、各サークルの公平を期すため、友の会支援の範囲を以下のように決めましたので、お知らせいたします。

①江戸博事務棟内の部屋（友の会事務室を含む）の予約
②館内コピー機による資料のコピー（操作はサークルのメンバーが行う）
③会合の開催通知、残資料の管理などは自主的に行う（支援の範囲外）

以上を各サークルの世話人にご説明し、ご協力いただくことになりました。今後新しいサークルを立ち上げる方はこれらを念頭にご準備ください。

## 会議・会合日誌

2006/6～2006/7

**◆役員会**

6月8日(木)18時から開催。懸案事項6項目についての担当を決め、8月～9月までに原案を役員会に提出することにした。サークル活動の支援の見直しについては提出案を了承した（本ページ「お知らせ」参照）。出席9名。

7月13日(水)18時から開催。懸案事項の「個人情報の取り扱い」については、提出案を了承した（本ページ「お知らせ」参照）。出席12名。

**◆事業部会**

6月6日(木)18時から開催。古文書講座の来年度のあり方について検討を開始した。友の会セミナーなどの開催時に実施するアンケート内容を検討した。出席者13名。

7月6日(木)18時から開催。6月実施の友の会セミナー・見学会のアンケート結果の報告があった。各種催事の開催日・時間帯について検討した。出席10名。

**◆広報部会**

6月14日(水)16時から開催。『えど友』No.33の内容について検討した。「私の昭和・東京」の投稿状況について、報告があるとともに、引き続き募集することにした。出席8名。

7月19日(水)16時から開催。『えど友』No.33の状況報告、同34の担当を決めた。総会記事の取り扱い、「お宝募集」について意見を交換し、併せて「奥付」の表記について変更した。出席7名。

**◆総務部会**

6月29日(木)15時から開催。三部会合同会議ほかについて意見交換を行った。部会に先立ち、『えど友』32号ほかの発送を行った。出席者12名。

7月4日(火)13時から開催。江戸文化歴史検定の緊急連絡葉書の発送、振込用紙の「友の会入会案内」への差込み作業を行った。出席5名。

7月26日(水)13時から開催。『江戸博NEWS』VOL.54などの発送作業の後、部会を行った。出席12名。

**◆3部会合同会議・懇親会**

6月29日(木)16時から開催。各部会の意見交換を行った後、江戸博1階「東京モダン亭」で懇親会を行った。出席25名。

**訂正**

『えど友』32号の別冊2ページ「平成18年度事業予算書」の2番目の表のタイトル「●支出の部」が脱落していました。また同表中、費目の「広報活動費」の18年度予算「2,310,00」は「2,310,000」の誤りでしたので訂正いたします。

## ◆◇ご意見・ご要望にお答えします◇◆

次のようなご意見・ご要望が寄せられていますのでお答えいたします。今後も友の会の運営全般や会報『えど友』の編集についてご意見・ご要望があればお聞かせください。

問　友の会の「ホームページ」から、各催事案内に入りづらいと思います。トップページに催事案内の「アイコン」を設けたほうがよいと思います。

答　確かにご指摘の通りですので、早速「催事案内のアイコン」をトップページに設けました。ご利用ください。

問　古文書講座も回数をかさね、皆さん相当読めると思われますので、

イ．くずし字の板書き解説は極力省き、本文解説に力点をおいてください。

ロ．分量は自宅学習を楽しめるよう多くしてください。

答　古文書講座は見直しの時期に来ていますので、9月に受講者からアンケートをとらせていただき、検討を行う際の参考にさせていただきます。最終的には講師とも話し合い、来年度から新たな形での実施を予定しています。

問　会員数も1000人を超したとのことで、会員の要望・要求も多様化してくると思う。開催日も平日と休日、昼間と夜間などきめ細かな対応が必要ではないか。

答　現在、平成18年度の各催事が軌道に乗りつつある段階です。その参加状況や参加者のご意向などもお聞きした上で、総合的に検討したいと思います。その結果についてはいずれ『えど友』誌上でお知らせします。

えど友

# サークルだより

会員の自主的サークル・「えど友サークル」の最近の活動状況をご紹介します。

**◎活動概況**

**◆江戸・東京を巡る会**：6月17日(土)江戸六阿弥陀・常光寺ほか亀戸近辺散策・参加者17名。

**◆落語・講談を楽しむ会**：6月23日(金)浅草寺界隈の落語の舞台を散策・参加者10名。7月19日(水)お江戸両国亭で女流講談を鑑賞・参加者3名。

**◆藩史研究会**：6月29日(木)川越藩史研究発表・参加者19名。7月25日(火)前橋藩史研究発表・参加者14名。

**◆古文書で『八丈実記』を読む会**：6月8日(木)、6月23日(金)、7月13日(木)、7月28日(金)開催。参加者は各11名、8名、9名、9名。

**◎スポット紹介**　「古文書で『八丈実記』を読む会」

6月23日13時半、江戸博事務棟2階会議室をのぞいてみました。この会は昨年9月スタート、今年から月に2回の会合を重ね、今回は第15回です。現在会員数11人、この日は出席者8名（男女各4名）でした。

この『八丈実記』は文政10年(1827)に23歳で八丈島に遠島になった近藤富蔵が、43歳から島の第一義的史料をあまねく収録、明治13年(1880)に赦免後も八丈島に住んで、没する明治20年(1887)まで、書き留めた八丈島に関する広範囲な記録です。富蔵は、北方探検家で書物奉行として有名な近藤正斉(重蔵)の長男で、隣家との地所争いから父重蔵のために隣家のならず者一家7人を殺傷し、罪を得たのです。この会が今読んでいるのは東京都公文書館が所蔵する「実記」の中の「八丈嶋年暦抜書」です。すべて行書体の毛筆書きですが、古文書としては比較的読みやすいように思いました。

この日まず、八丈島から江戸に向かう船がしばしば漂着する港として記載されている「新湊」とか「内浦」が現代の地図上で何処になるかを考証した研究を、小山治夫氏が発表しました。新湊は房総半島突端の「乙浜」あたり、そして「内浦」は鯛の浦の近く、安房天津」あたりだそうです。小山氏は帝国海軍水路部の図面まで追いかけて細かく調査されたようです。地図の上で八丈島から直線を引いて見ると、航路としては伊豆七島を次々と左に見て航海すれば比較的容易に新湊や内浦に到着できそうに思いました。

小研究発表のあと、交代で文書を読んで行きました。読解能力は全員なかなかのもので、飛び入りの筆者は、ついて行くのが結構大変でした。わからないところやトピックによっては随時質問や討論が起こります。全員が和やかで談笑しながら進んで行きます。時には討論に花が咲いて脱線状態になります。実質、進行を制御しているのは、この会の発起人の一人、大野晴美さんと見えました。大野さんは適当に脱線を楽しませながら、さっと軌道に戻して会を進めて行く、その腕前はなかなかのものです。途中に休憩をはさんで約2時間で解散しました。

明るく楽しく、あっさりと通読して行って、特定の問題に興味ある人は研究して発表する、というのがこの会のスタイルであろうかと思いました。

【取材】文・写真：広報部会・佐藤幸彦

# えど友ブログ

～友の会会員の投稿欄～

特集
＜私の昭和・東京＞ その２

## 徴兵・軍国主義・靖国神社

小柳英二郎

「明治は遠くなりにけり」が一時大流行しましたが、戦後60年たった今、「大正、昭和は遠くなりにけり」としたいところです。

「徴兵」という言葉は死語となり、今の若い人には理解不可能です。大正生まれの人々は昭和に入って徴兵にひっかかり、その青春を太平洋戦争にとられたのです。

国家は徴兵法に基づき満20歳の若い人を検査し、甲種合格、乙種合格、その他として、甲・乙合格者は強制的に兵舎に送り込まれました。そこで国家のためにという美名の下にきびしい対敵人殺しの訓練がなされたのです。兵舎で待っていたのは兵長、上等兵などの古参兵で、新入兵をなぐったりしてこき使いました。これを知って若い人たちは将校を志願し、陸軍士官学校、海軍兵学校に殺到しました。合格率はどちらも十数人に１人というきびしいものでした。

国家のために死んだ英霊をまつる靖国神社に首相が参拝するのはわれわれには当たり前のことですが、韓国、中国側では殺人暴行の被害を受けているのに参拝はおかしいということになります。これは立場の相違なので今後の国際友好関係を発展させるためには首相の参拝は取り止めるべきかと思います。今では戦後という言葉も死語です。新しい若い人の大活躍を期待します。

## 「ああ隅田川溷濁の」

手島義之

「ああ隅田川溷濁（こんだく）の」、これは、私が中学高校時代を学んだ母校の校歌の一節である。

この校歌ができたのは大正４年(1915)頃だという。当時、校舎は神田三崎町にあり、大正12年(1923)に地を本所横網に求め校舎を建設中に関東大震災に遭遇して灰燼に帰してしまう。翌年に竣工を見て、移転している。私はこの学校を昭和29年(1954)に卒業している。

その当時、隅田川は濁っていたのだろうか。以前には、両国橋の上から白魚の泳ぐ姿を目で追うことができたほど清く澄んだ流れだったという。隅田川の流れに大きく影響したのは、関東大震災、東京大空襲、そして戦後の高度成長期の公害、工場排水、生活汚水による汚染などである。

鉄道旅行作家といわれる宮脇俊三は『乗る旅・読む旅』の中で、「両国橋の下をくぐると左から神田川が合流する。……この付近は弦楽の巷（ちまた）だった柳橋で、私は30年ぐらい前に一度きたことがあるが、隅田川の悪臭がひどいので座敷の障子が開けられなかった。いまは下水道の完備で水がきれいになり、魚も戻ってきたという。」と記している。この文は平成11年(1999)の作で、30年前というと昭和44年(1969)頃のことであろう。

司馬遼太郎は『本所深川散歩・神田界隈　街道を行く36』で隅田川を舟で遡上（そじょう）し、千住大橋あたりまできて、「水が漲（みなぎ）ってながれてゆく。色は、よく磨かれた西洋甲冑のように黒ずみながらもきれいで、隅田川がドブになったといわれた二十年ほど前のことをおもうと、存外なおもいがした。」と記している。この作品は平成２年(1990)とあり、20年前というと昭和45年(1960)頃のことであろうか。

終戦後の隅田川について、竹内誠氏（江戸東京博物館館長）は、「東京中が一面の焼野原となり、隅田川に流れ込む生活排水は微々たるものになった。上流の工場も空襲でやられたり、電力不足で操業を中止したりして、工場排水もほとんど出ない、江戸時代の隅田川もかくばかりかと思われる澄んだ隅田川となった。」（『現代に生きる江戸談義十番』）。

中学時代（昭和21～23年頃）の竹内氏は、夏休みにそのきれいになった隅田川で水遊びをしたという。水遊びの場所は、新大橋から両国橋の間ぐらいの所だった。

今日、隅田川はかつての汚れから回復し、きれいになった。毎年行われている隅田川の花火大会もそれを象徴している。

## 母の胎内でみた大空襲

小山　実

坂本龍馬は少年時代まで寝小便をよくしていたとの伝説があるらしい。

わたしも小学校上級近くまで寝小便をして布団をぬらしていた。思い出してみると寝小便には原因があった。火事の夢を見ては自前の消火器から放水していたのだが、生まれてから実際の火事は見たことがないので、昭和20年(1945)３月10日、わたしは母の胎内に居て、燃える風景を母胎を通して見ていたから、生まれてからも火事の夢をよく見たのだと、自分に言い訳している。

近くに桶屋さんが居て、独特のアールをした刃物で乾いた木材を削る、シュッ・シュッという音が今も耳の奥に思い出される。夕方になるとコウモリが飛び交い、履いていた下駄を蹴り上げて裏表を当てたりした。改正道路と呼ばれた現在の蔵前橋道路は、東西に橋がなかったので広い滑走路のようになっていたから、竹棒の先にベーゴマを付けて磨いたり、夏休みには道路一杯にラジオ体操の人たちが広がり、今では夢のような光景が展開していた。

所々に広い空き地があって、トカゲやトンボを追いかけ、ドラム缶が置いてあれば寝ていた。大きな水溜まりに

はいかだを浮かべ、ヤゴやオタマジャクシをすくった。日が暮れ始めると、「○○ちゃんご飯よー」「いつまで遊んでるの、暗くなるわよ」と、エプロン姿の母親の声がアチコチから聞こえ始めた。

中学校の窓から総武線を走る蒸気機関車が近くに見え、連結された貨車の数を数えると、いつも50両は超えていた。駅の近くに長屋形式の国鉄職員住宅があり、当時はあこがれの職種であった。ツバメが飛び交った駅前に20階のマンションが建ったが、直ぐ横のお稲荷さんは取り壊されず、少年の記憶を今につなぎ留めている。

## 私の昭和・東京 学童疎開

菱山恭子

朝、うす暗いうちに学校に集合、両親に手を振り、私達の学童疎開が始まった。電車に乗り、着いた所は西多摩郡霞村（現・東京都青梅）。お寺まで行く道にはさるすべりがあり、田舎らしい風景にとけこんだお寺であった。そこでの1年3ヵ月の疎開生活。お父さんお母さん、「おはようございます」で始まり、「おやすみなさい」で終わる毎日だった。疎開の食事は大きなどんぶりに少しの米とあとは豆ばかりの毎日だった。お腹いっぱいにならず、畑のさつまいもをよく生のままかじっていた。甘かった。つくしんぼなども寮母さんの部屋へ行き、さっと焼いて口に入れた。病気になると白米が食べられると、皆、仮病になったりして白米の白さに負けた。

シラミにはまいった。寺の石段に猿のように並んで、すき櫛でお互いの髪の毛をすくと、新聞紙の上にパラパラと黒い毛ジラミが落ち、逃げるところを親指の爪でプチプチとつぶす。ゲームのごとく追いかけてはつぶして、爪はシラミの吸血で真っ赤になる。パンツの縫い目も髪の毛も、キラキラと光る米粒のごときシラミの卵でいっぱいだった。

楽しいこともあった。学芸会ではみな歌ったり踊ったりで空襲を忘れた。

毎年8月になると戦争月間になり、学童疎開も懐かしい思い出となってしまった現在、時代の流れは速く、昭和もはるか彼方になってしまったが、忘れることができない学童疎開。親と離れて生活した日々が今の子供たちには2度と来ないよう祈ります。

## むかしむかし？

野坂紘子

東京のはずれ小岩に住んではや半世紀たった。私が小学生だった50年前、今は花みずきの植わった小しゃれた道路はドブ川で家々の庭先にはいちじくの木が植えられていた。もともとは小川で小舟が行き交い、たぬきも住んでいた。

この地に越してきた頃はボウフラがわき、糸みみずで赤く染まったドブだった。しかし、雨が降るとつかの間元の姿を取り戻し私たちは笹舟を流して遊んだ。

裏には溜池があってアシが茂り黄色のしょうぶが咲き水面を水草が覆い、雷魚やエビガニが釣れ、アヒルが泳いでいた。よく亀やドジョウや大きなイボガエルがのこのことやってきたものだ。庭のヒマワリにはシオカラトンボが止まっていた。今では池は埋め立てられてアパートになり、夏には仲の良いご夫婦の痴話げんかが聞こえてきたりする。

中学へ向かう道筋には黄色の稲穂、レンゲの赤いじゅうたんの田んぼがあり、ゆるやかな丘の畑にはみずみずしいサラダ葉が育っていた。ヘビが昼寝をし糸トンボが飛び交い、すいかずらが甘いにおいを放つ道をマラソンでトコトコ走らされたものだ。何の変哲もない住宅地となって久しい。

私の家は駅の近くにあるが、子供の頃の駅舎は木造でペンキがはげてかなりのボロ、ツバメが巣作りをして飛び交っていた。駅員さんに切符を渡しパチンとハサミを入れてもらうのが楽しみだった。駅前の通りはアーケードになっているが、その頃はまだ土だったのではなかろうか。道の真ん中を金髪のマジメな顔をした白いシャツの婦人が町の肉屋で買ったコロッケを食べながら歩いてくるのに出会った。外国人とはなんて行儀が悪いのだろうとびっくり仰天したのはたしか小学校の3年生か4年生の頃だったろう。

そのころの写真が1枚ある。クリスマス会のもので真ん中のウサギが私。当時先生方はグループ学習にこっていて、よくグループで人形劇、演劇、創作などをやらされた。

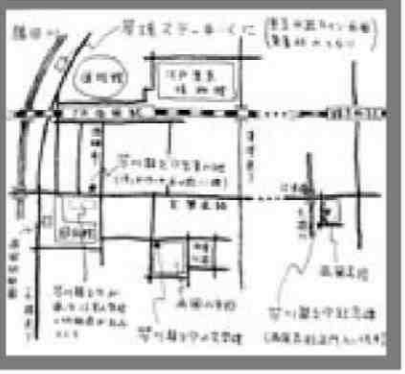
外国人の行儀の悪さに驚いてから半世紀、今では町を歩けば中国語、韓国語が聞かれ、インドの方も多い。白人、黒人、アジアのきれいな娘たち、50年後はどうなっていようと驚くものかと最近は思う。

※「私の昭和・東京」へのご応募ありがとうございます。誌面の都合で今回掲載できなかった方は次号以降順次掲載してまいります。引き続き投稿をお待ちしています。

ちょっと寄ってみませんか？

# 隅

[芥川龍之介史跡]と[炭火ステーキ・くに]



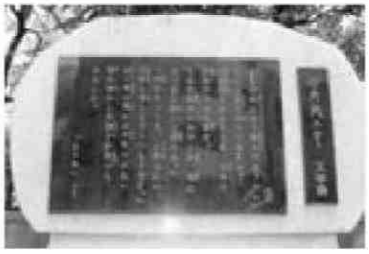
⑪

## 芥川龍之介と両国

大川をこよなく愛していた芥川をしのび、まず私たちが向かったのは、両国橋でした。彼はなぜそんなに大川を愛したのか自問し、「ただ、自分は昔からあの水を見るごとに、なんとなく、涙を落としたいような、言いがたい慰安と寂寥とを感じた。まったく、自分の住んでいる世界から遠ざかって、なつかしい思慕と追憶との国にはいるような心もちがした」と、処女作『大川の水』で述べています。

両国橋から京葉道路左側の道を錦糸町の方向へ5、6分ほど行くと、芥川家跡（墨田区両国3-22-11）です。今はほっかほっか亭になっており、道路際に棒状の碑が建っています。芥川が生まれたのは明治25年(1892)、現在の中央区明石町ですが、母親が心を病んだため生後7ヵ月のとき、母親の実家・芥川家に預けられ（後に継養子となる）、この地で18歳まで過ごします。

幼稚園は「回向院の隣の江東小学校の附属」(『追憶』) で、小学校は幼稚園と同所の江東（尋常）小学校です。いまその流れをくむ両国小学校（墨田区両国4-26-6）の一角に、道路に面して記念の文学碑があり、『杜子春』



の一節が書かれています。

「『お前はもう仙人になりたいといふ望も持ってゐまい。大金持になることは、元より愛想がつきた筈だ。ではお前はこれから後、何になったら好いと思ふな。』『何になっても、人間らしい、正直な暮しをするつもりです。』杜子春の声には今までにない晴れ晴れした調子がこもってゐました。」

明治33年(1900)、芥川は府立第三中学校（現都立両国高校・墨田区江東橋1-7-14）へ入学します。再び京葉道路に出てさらにまっすぐ30分ほど歩くと、江東橋の右手に両国高校があります。校門を入ってすぐ左手の記念碑には「もし自分に『東京』のにおいを問う人があるならば、大川のにおいと答えるのに何の躊躇もしないであろう。ひとりにおいのみではない。大川の水の色、大川の水のひびきは、我が愛する『東京』の色であり、声でなければならない。自分は大川があるがゆえに、『東京』を愛し、『東京』あるがゆえに、生活を愛するのである。」(『大川の水』) と彫られていました。

昭和2年(1927)、東京日日新聞（現毎日新聞）に泉鏡花、島崎藤村、田山花袋らとともに連載「大東京繁盛記」を執筆。芥川はそのなかで、〈本所両国〉を取材しています。“大溝”、“両国”、“富士見の渡し”、“お竹倉”、“大川端”、“一銭蒸汽”、“乗り継ぎ「一銭蒸汽」”、“柳島”、“萩寺あたり”、“「天神様」”、“錦糸町”、“緑町・亀沢町”、“相生町”、“回向院”と15回。本所両国の激しい変貌ぶりに驚き、その昔を懐かしみ、震災後とて多くの友人・知人のすでにないことを嘆いています。最終回は“方丈記”と題し、鴨長明『方丈記』の一節を引いています。「いにしえ見し人は、二、三十人が中に、わずかに一人二人なり。朝に死し、夕に生まるるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。知らず、生まれ死ぬる人、何方より来たりて、何方へ去る」と。35歳で彼が世を去ったのは、この2ヵ月後でした。

## 炭火ステーキ・くに

客の日の前で注文のグラム数だけ切り分けてくれるオーダーカットが売りもののステーキ屋だが、ランチにも力を入れていて、贔屓の客も多いようです。

ランチのステーキ(980円）はオーストラリア牛肉(150g)、味に期待はしていなかったが、思っていたよりは美味。そのわけを聞いてみると、第1は味のある腹肉の部分を使い、「やわらか加工」と明示されているように、和牛の牛脂などを足して生肉の段階で加工されています。第2は塩です。60種類以上の天然ミネラルを含む海水でつくった博多の塩を焼いて細かくひきなおし、味が満遍なくいきわたるようにしていました。第3に備長炭を使い、内にはうまみをぎゅっと閉じ込めて焼き上げているそうです。

またジャンボハンバーグ（300g・1000円）も売れ筋で、ステーキとこれで70%を占めます。特色は牛肉あ100%、熱した鉄皿の上でプチプチと焼けているのがいただけます。ご飯もあるが、温かいクロワッサンと共に供されるよもぎパンが評判がいい。みそ汁に手を抜いていないところも好感がもてます。

オーダーカットの場合は、オーストラリア牛で1g10円、和牛で20円、米沢牛は28円。そのほか、あさりのびっくり焼き(700円)も人気メニューです。びんビール、生ビールとも550円。ワイン、日本酒もあります。値段はすべて税抜き。

墨田区1-2-16　江戸博から徒歩5分　電話03-3623-9215　年中無休　営業時間　11時～23時　ランチタイムは16時まで。

【取材】 文：広報部会・大野晴美
地図・写真：同・松原良

# 催事案内

## 古文書講座

### 第２期を 10 月から開講

古文書講座の今年度第２期を 10 月から開講します。第１期と同様、「入門編」、「初級編(1)」、「初級編(2)」の３講座です。ぜひご参加ください。

すでに第１期を受講されている方については、特に不参加の申し出のない限り、自動継続となりますので、お申込の必要はありませんが、別の講座を希望される場合には，改めてお申込が必要です。

**◆第２期の日程など**

＊入門編　10 月４日(水)、11 月１日(水)、12 月６日(水)
＊初級編(1) 10 月 18 日(水)、11 月 15 日(水)、12 月 20 日(水)
＊初級編(2) 10 月 21 日(土)、11 月 18 日(土)、12 月 16 日(土)
・開催時間：すべて 14：00 ～ 16：00
・定員：各 80 名
・会場：江戸博１階会議室または学習室１・２のどちらか（当日お確かめください）
・講師：長坂良宏さん(学習院大学大学院史学専攻)、小松賢司さん(同)、小宮山敏和さん(徳川林政史研究所)
・参加費：１講座 1,500 円(初回当日払い・各講座とも)
・申込締切：入門編９月 19 日(火)必着、初級編(1) 10 月３日(火)必着、初級編(2) 10 月５日(木)必着

**◆第１期の残り日程**

＊入門編　第１期：第３回　９月６日(水)
＊初級編(1) 第１期：第３回　９月 20 日(水)
＊初級編(2) 第１期：第３回　９月 16 日(土)

【企画担当責任者】 上田太一(事業部会)

## 特別内覧会

### 特別展
### ボストン美術館所蔵　肉筆浮世絵展
### 江戸の誘惑

◆ボストン美術館に寄贈され、館外貸出が制限されていた医師ウィリアム・ビゲロー氏の浮世絵コレクションの中から選りすぐった肉筆浮世絵の名品約 80 点が展示されます。菱川師宣、喜多川歌麿、葛飾北斎、歌川広重など、江戸時代を代表する浮世絵師たちが描いた名品の数々が、永い眠りから覚め美しく鮮やかな色彩のまま日本に里帰りします。

・開催日：10 月■日(■)■：■～■：■
・申込締切：10 月■日(■)必着
・会場：江戸東京博物館・１階ホール／１階企画展示室
・定員：100 名　同伴者可(はがきに氏名連記)
・参加費：会員 500 円、同伴者 700 円

【企画担当責任者】 伴野睦雄(事業部会)

## 友の会セミナー

### 第 43 回「映像史の視点―写された明治の東京」
### 講師　深川英雄さん

◆フランスのリュミエール兄弟がパリのグラン・カフェで世界で初めて動く映像[映画]をスクリーンに上映したのは 1895 年(明治 28) 12 月 28 日でした。しかも驚いたことに、そのわずか２年後にはリュミエール商会から派遣された二人のカメラマンが明治の東京を撮影しています。その経緯、写し撮られた東京・日本の姿、その後の日本映画への影響などを、最近の研究成果も踏まえてお話いただく予定です。

○講師略歴：ふかがわ・ひでお
駒沢女子大学映像コミュニケーション学科教授。日本映像学会会員。日本広告学会理事。形の文化学会会員。著書に『キャッチフレーズの戦後史』(岩波書店)『やわらかい時代の発創術』(読売新聞)など多数。

・開催日：９月 23 日(土・祝) 14：00 ～ 15：30
・申込締切：９月 14 日(木)必着
・会場：江戸東京博物館・１階会議室
・定員：100 名　同伴者可(はがきに氏名連記)
・参加費：会員 500 円・同伴者 600 円(当日払い)

【企画担当責任者】 松原良(事業部会)

---

### 第 44 回「江戸の最高学府
### ー昌平黌とそこに学んだ人々ー」
### 講師　村山吉廣さん

◆教育の荒廃が叫ばれながら何十年たったでしょうか。子に何も教えない親たち、生徒に何も教えない先生、また学ぼうとしない子供たち、それに追い打ちをかけるような少子高齢化、はたして日本はどうなって行くのでしょうか。今回は、昌平黌に学び、幕末・明治にかけて日本をリードした人たちの生き方を話していただきます。一服の清涼剤になればと思っています。

○講師略歴；むらやま・よしひろ
昭和４年(1929)春日部市出身。早稲田大学文学部卒業。同大文学部教授を経て、名誉教授。日本詩経学会会長、(財)斯文会常任理事。著書に『名言の内側』(日本経済新聞社)、『楊貴妃』(中央公論新社)など多数。

・開催日：10 月 28 日(土) 14：00 ～ 15：30
・申込締切：10 月 19 日(木)必着
・会場：江戸東京博物館・１階会議室
・定員：100 名　同伴者可(はがきに氏名連記)
・参加費：会員 500 円・同伴者 600 円(当日払い)

【企画担当責任者】 清水良男(事業部会)

## 見学会

### 「神田・お茶の水を歩く」

◆江戸幕府の学問所として名高い湯島聖堂、日本最大のビザンチン様式建築のニコライ堂、明治大学などの学生街、神田祭・天下祭で有名な神田神社(神田明神)、旧万世橋駅舎跡など、江戸、明治の情緒いっぱいの神田・お茶の水周辺を歩きます。なお、今回も要望の多い懇親会をオプションとして計画しました。

・開催日：9月30日(土) 12時45分集合、ただし集まり次第時間前に順次出発します。
・集合場所：JRお茶の水駅(神田側改札口)
・申込締切：9月8日(金)必着、オプション希望有無明記
・定員:80名　同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)
・参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)
・オプション会費は2,500～3,000円を予定。予約制のためキャンセルの連絡は9月20日までにお願いします。連絡なくご欠席のときは会費を徴収させていただく場合があります。

【企画担当責任者】 藤村武雄(事業部会)

### 「世良田東照宮見学バスツアー」

◆今回は徳川家発祥の地と伝えられる群馬県太田市の世良田・尾島地区を訪ねます。主なコースは新田町生品神社(新田義貞旗揚げの地)、世良田・長楽寺(天海の育った寺)、東毛歴史公園、世良田東照宮(日光東照宮の前身を移築した神社で重要文化財)、東毛歴史資料館、萬徳寺(北の縁切り寺)・萬徳寺資料館(縁切り博物館)、時間があれば茂林寺(文福茶釜の寺)など。昼食は東毛歴史公園で名物のとろろ定食です。

・開催日：10月14日(土)午前7時30分集合、8時出発
・集合場所：江戸博(バス駐車場)
・申込締切：9月14日(木)必着
・定員：90名(バス2台)　同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)、申込多数の場合は抽選
・参加費：会員5,000円(昼食代・拝観料約1,500円を含む)同伴者6,000円(同)。参加費は前納(参加予定者に振込み先と期限を通知します)。

【企画担当責任者】 藤村武雄(事業部会)

## お申込方法

◆普通はがきに、①催事名・開催日、②会員番号、③氏名（同伴者連記）を明記して下記の「友の会事務局」へ。
「往復はがき」の必要はありません。
なお、見学会に限り傷害保険の関係で同伴者の氏名、住所、電話番号も書いてください。
◆締切：各催事の案内をご覧ください。
◆申込は、各催事ごとに会員1人1通。
◆友の会へのご意見・ご要望もご記入ください。
◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。
＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更のご連絡などはなるべく水曜日か金曜日にお願いいたします。
＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

## 会員優待のお知らせ

好評開催中 お見逃しなく！

### ●特別展 驚異の地下帝国 始皇帝と彩色兵馬俑展 ～司馬遷『史記の世界』～

会　期　2006年8月1日(火) ～10月9日(月・祝)
休館日：毎週月曜日、ただし9月11日、9月18日、10月9日の各月曜日は開館
図　録　定価2,200円、会員は1割引
会　員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円

### 次回予告

### ●特別展　ボストン美術館所蔵 肉筆浮世絵展　江戸の誘惑

会　期　2006年10月21日(土) ～12月10日(日)
休館日：毎週月曜日
図　録　定価2,000円(会員割引は未定)
会　員：一般000円、65歳以上000円、大・専門生000円
同伴者：一般000円、65歳以上000円、大・専門生000円

会報＜えど友＞第33号
平成18年9月1日発行（隔月奇数月1日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

編集長兼発行人：松原良(副会長)　副編集長：菅沼和男
編集人：岡橋園子、佐藤幸彦、大野晴美、斉藤美香子、稲垣武志
岡田守弘、岡本静雄、林榮治、大石憲一
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網1-4-1　電話03-3626-9910